

日本書紀傳卅二卷二

百四十三

和書  
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (151)	
函號	特	85 1

内一六八三號





教部省  
文庫印

同書  
文庫印

青政直  
文庫

青政直  
文庫

既而天照太神以思兼神妹

萬幡豐秋津姬命配正哉吾

勝勝速日天忍穗耳尊為妃

令降之於葦原中國是時勝

速日天忍穗耳尊立于天浮

日本書紀傳三十二

〇六十七

丙一三六八三號



橋而臨睨之曰彼地未平矣

不須也頗傾凶目杵之國歟

乃更還登具陳不降之狀

天忍穗耳尊の初て天降し御在り坐ける事件ハ甚己事ふて大抵大己貴少彦名神の國土を經營し

御在り坐ける間ふて其降著て御在り坐すて止め事此卷首に委しく述ぶるが如く借此御天降の御

事不就て大ふる論ころ有けれ天神本紀に天照太

神詔曰豊葦原之千秋長五百秋長之瑞穗國者吾御子

正哉吾勝ニ速日天忍穗耳尊可知之國言寄詔賜而天

降之時高皇產靈尊兒思兼神妹萬幡豐秋津師姬栲幡

命之時正哉吾勝ニ速日天押穗耳尊奏曰僕欲將降裝

束之間所生之兒以此可降矣詔而許之天神御祖詔授

天璽瑞宝十種略饒速日命稟天神御祖詔兼天磐船而

天降坐於河内國河上哮峯則过坐於大和國鳥見白庭

山所謂兼天磐船而翔行於大虚空巡睨是郷而天降坐



矣所謂虚空見日本國是歟饒速日命便娶長髓彥妹御  
炊屋姬為妃令妊胎矣未及產時饒速日命既神殞去坐  
矣而不復上天之時略中天照太神謂豐葦原之千秋長五  
百秋長之瑞穗國者我御子正哉吾勝ニ速日天押穗耳  
尊可王之地詔賜而天降之時於天浮橋立而臨睨之曰  
豐葦原千秋長五百秋長之瑞穗國者猶聞喧擾之響彼  
地未平矣不須也頗頌凶目杵之國歟乃更還登復於上  
天具陳不降之狀略中正哉吾勝ニ速日天押穗耳尊以高  
皇產靈尊女枿幡千ニ姫萬幡姬命為妃居於虛天而生  
兒号天津彦火瓊杵尊因欲以此皇孫代親而降矣天

照太神詔任白可降矣宜以天兒屋命天太玉命及諸部  
神等皆悉相授且服御之物一依前授然後天忍穗耳尊  
更還復於天上矣略下所見なる此趣ふてハ其始皇祖  
天神の詔命を以て此國土を天忍穗耳尊小事依一授  
奉して給へる趣も至て此書及古事記の傳ハれるが如し  
然るも其尊の天降らせ御在し坐むと為し間も饒速  
日命ハ生坐る故も此を以て降し給ふ可き由を奏請  
させ給へるも依て詔して十種神宝を授けて天降し  
給へるを已く神殞去給ひしうが再御命負せて天忍其御父  
穗耳尊を天降させ給ひしうがも此國の未平ありと



るが故に還上りて其降坐ざる状を陳ませ給へる仕  
ふ其より天穗日命を巡察使小天稚彦を征伐使小降  
し給ひ最後ハ經津主神武甕槌神を降して荒振る  
國神等を言向け大己貴神を媚和して此國土を避せ  
奉り事成しうバ天忍穗耳尊を天降し坐むと爲るふ  
虚天ハ於て瓊杵尊の生坐るが爲ハ再奏請て其御  
子を天降奉りして終ハ天降り御在し坐ずして止め  
る事此ハ至りて前後凡て三度ありと雖も其初度ハ  
饒速日命を代て天降し給ふと云ハ一家の私説ふて  
甚ハ淺かりき僻傳ふふむ有ける此ハ先達も己ハ云

るが如く決めて物部氏ふどの私傳ふる可き事云も  
更あり且舊事紀ハ凡て饒速日尊と作るを予が引  
を撰ハれし頃ハ美許等と云ハ相通ハして命字の  
自餘曰命並訓美許等と注これ天皇皇太子の如  
く天鈔ハ抱りたるハ尊字を被用る文法ふるが故  
小饒速日命の如きハ天照太神の皇孫瓊杵尊の兒  
皇兄ありと雖も猶命字を書れ且天穗日命天津彦根  
尊命ふざハ天照太神の皇子天忍穗耳尊の皇弟ふる  
ふがくハ尊字を書れざるを以て其私ふる事を知べ  
し饒速日命ハ予も其御衣ハ在りければ如何も崇  
奉り將欲き者う其ハ内心の事ころハ有め主張て  
天下ハ對云ふハ掛まくも恐き天津日嗣ふどハ並  
奉りて混ハし書法を取べきハ非ず其御神の御  
心も然る名分の乱ガハくきを争てハ甘ふらせ  
御在し坐む此皇典を天下の爲ハ明しむるを任せ  
爲て私事を爲す時ハ其祖神饒速日命ハ對奉りても  
眾人なござる事を得ず此を以て舊事紀の私意を故



正して公正ふる御紀の文例ハ、一壓乞久其然る可二り  
従奉し三ひハ何の憚る事四あり有五む  
りざる由を辨ふ可六し其天照國照彦天火明櫛玉饒速  
日命七と聞え八まするハ傳九サ一十四十一下十二廿十三二十四七十五下十六小注十七せり  
天糠戸神の御事十八ハ坐十九て其御子天香語山命二十と申すハ  
謂ゆる石凝姥命二十一ハ渡二十二りて給二十三へれハ瓊二十四杵尊二十五より  
ハ瓊二十六杵遠二十七く古二十八小生坐二十九る神三十なり然三十一るを石三十二小僕欲三十三將降  
裝束之間所生之兒三十四以此可降三十五矣三十六と有三十七ハ此一書三十八ハ天照  
太神勅三十九曰若然者方當降吾兒四十矣且將降間皇孫四十一已生号  
曰天津彦四十二火瓊四十三杵尊時有奏曰欲四十四此皇孫四十五代降四十六と見  
え古事記四十七ハ其太子正勝吾勝四十八速日天忍穗耳命答

白僕者將降裝束之間子生出名天迹岐志國迹岐志天  
津日高日子番能迹一藝命此命應降也二と有三と書四て書  
掠五めたり者六あり且饒速日命稟天神御祖詔乘天磐  
船而天降坐於河内國河上喙峯則迁坐於大倭國鳥見  
白庭山七と有八る此ハ神武天皇前御紀九ハ又聞於塩土老  
翁曰東有美地青山四周其中亦有衆天磐船飛降者十中略  
厥飛降者謂是饒速日十一歟十二と見えて其ハ國神十三ハ聞十四して  
其饒速日命の天降坐十五と事十六を所知食十七れる趣十八あり然十九る  
を若御父天忍穗耳尊二十ハ先立二十一して天降二十二りて給二十三へり神  
あ二十四むハ聞傳二十五へても争二十六で二十七ハ所知二十八者二十九づ三十む其上



古事記の東征段に故尔尔藝速日命參赴白於天神御  
子聞天神御子天降坐故追參降來即獻天津瑞以仕奉  
也と有て其天降坐る天神御子と申すハ瓊杵尊の  
御事より追參降來と云ハ其御代を過して彦火と出  
見尊昔不合尊の御世頃よりけむ事申すも更あり其  
天津瑞と云ハ右ハ謂ゆる十種神宝を云べし且右ハ  
饒速日命便娶長髓彦妹御炊屋姫と云ふ此ハ其神武  
天皇御世の始の人あり凡て神代ハ人の壽長より  
ければ其ハ疑を容べらざるも強て云ハド云べ  
し然れども其饒速日命の神殞去坐しよ因て天照太

神謂豊葦原千秋長五百秋長之瑞穗國者我御子正哉  
吾勝ニ速日天押穗耳尊可王之地詔而天降之時云々  
と云るハ此の文を以て其ハ續たるふて僻事とも何  
とも云ふ断たる妄説あり若右の如くハ長髓彦ハ大  
己貴神と同時ふ此國を主領し居たりし者の如く成  
て如何ふる上ハ先ハ天忍穗耳尊の降らせ給ふ可  
うを其御子饒速日命を以て代りしめ後ハ其饒速  
日命の薨くせ給へるふ代て其御父天忍穗耳尊を天  
下の大君と爲て降させ給ふと云事實ハ似ても著  
ざる偽ふる事著明者ありし  
同ハ饒速日命の御  
上ハみがり天孫本紀



ふ書せる事共ハ然もやと思ゆる事も有れども同  
一書の中かて右ハ擧たる天神本紀ハ大ハ背ける  
事多き者あり思ふハ天孫本紀あるのハ尾張物部  
西氏の家説ありつゝ其を本取て御紀及古事  
記の文を所ハ截入て此舊事紀を作れる志作者の  
志説ふ成れる故ハ右の如く前後相揃ハぬ僻傳ハ  
成就し右の如く章句を逐て此を辨正す時ハ悉く僻  
事ふごる事無しと雖も其饒速日命の御在天降の  
御事ハ至りてハ右の趣ある事必無しハ云べし  
ざるあり其ハ傳ハ廿一三百九ハ百四十九下ハ注るが如く丹  
後風土記ハ當國者往昔天火明神等降臨之地也と有  
て其妃天道日女命其子天香語山命等其孫天村雲命の故事多く傳  
れるを思以考ふるハ此一書の如く天忍穗耳尊の始て

天降レて御在レ坐ける供奉ふて饒速日命以下の神  
とも共ハ天降レて給へる者と所見なり然るハ天忍  
穗耳尊ハも天浮橋より還上レて御在レ坐しハりど  
も饒速日命等ハ此時齋庭之穗を持しハ豊宇氣大神  
を供奉して嘗ハ此國ハ御在レ坐し著せ給へりけし  
何を以て御父天忍穗耳尊ハ一時ありしと云ハ其  
天神本紀ある供奉三十二神の中ハ天伊岐志迹保命  
山代國造等祖ハ有ハ天津彦根命の流るる山背國造  
ハ別ハて姓氏録山城國神ハ水主直火明命之後也  
ハ有ハ神名式ハ山城國久世郡水主神社中十座並大  
月夜



新嘗就中同水主坐天照御魂神水主と見え其祖神  
坐山背大國魂命神ニ座預相嘗祭  
を祀れるが其天照御魂神と聞ゆるは饒速日命の御  
事ある由傳(四)廿一五十小注る如くおれは右小天伊  
岐志迹保命ハ其饒速日命ハ御在し坐を別神と心得  
以舉たるハ非ふが其三十二神の中ハ收めたる是  
一證あり又天造日女命阿曇連等祖と有る造ハ道字  
を誤れるある可し阿曇連ハ海神の末あるを此時天  
上より降る可き事ハ決小無き事おれは此阿曇の音  
を取れるよて阿刀連ある可し姓氏録山城国神小阿  
別天神  
刀宿祢阿刀連等有る石土同祖饒速日命孫味饒田命

之後也と有り但此ハ後ハ御炊屋媛を娶て生坐る可  
美真乎命の末おれども其祖ハ同ハ饒速日命ハ坐る  
此の混れハ所見たり此ハ天道日女命を云る是ニ證  
あり次ハ天香語山命尾張連等祖と有ハ天孫本紀ハ  
天照國照彦天火明櫛玉饒速日命天道日女命為妃天  
上誕生天香語山命と見え次ハ天牟良雲命度會神主  
等祖と有ると同紀ハ天香語山命異妹穗屋姫命為妻生  
一男孫天村雲命亦名天  
五多底と見え次ハ天糠戸命鏡作連  
等祖と有ハ右ハも注る如く饒速日命の亦名あるが  
出たるあり此を除て其三神の名共何れも丹後風土記ハ各故



事を載たる是三證四證五證あり次小天日神命對馬  
縣主等祖天月神命壹岐縣主等祖と有る此小似著し  
うハ同記小日尾社祭神天日尾神國日尾神天月尾神  
國月尾神と有る由有れが饒速日命の供奉三十二神  
と云ハ天忍穗耳尊の供奉神ありしふて其尊り中天  
より引返し上りて給へれども天火明命以下の神等  
ハ一度天降りして先ハ丹後國小御在し坐なる狀ふ  
りけり右の如くふて其三十二神と云も然る傳の有  
壯撰せるハ非く思ふ然る實ハ其天忍  
穗耳尊の供奉ふて饒速日命以下の神等の各從ひて  
降りて給へるなり然る傳ハ有る其神名の異れ  
るを以て別神の如く思成りて其も此も共ハ饒速日

命の供奉神とハ然りて天火明命以下の神等ハ丹後  
物爲つるふり然りて天火明命以下の神等ハ丹後  
國小御在し坐り著て此小所を得て住坐りしあり風  
土記小伽佐郡志樂郷本知領所以號志樂者往昔少彦名  
命天穴持命當巡覽所治天下時悉巡行於此國畢更到  
坐于高志國之時召天火明神詔汝命者可領知此國火  
明神大歡喜乃曰永世也青雲乃志良久國矣故云志樂  
也と有て大己貴少彦名ニ神より此國を進らせたる  
趣より上件の事共小合て考ふるハ天忍穗耳尊の初て  
天降りて給ふ御時のニ神の國作の末ふりて高天  
原の神議己小定りて天穗日命以下次の神等を降



△を此も先小御父  
神と美小其回小  
御在し坐けむか  
先小よりて其供  
奉り又其國小  
移住坐りと思し  
こ

給へるハ大己貴神一柱ふて此國を主領せ御在し  
坐す頃間ふて其再の御天降の御時頃小は饒速日命  
等ハ引替りて天上小還上りて御在し坐てけむと思ゆるハ古事記ハ其天恩穗耳尊の供  
奉ふて降ふせ給ひむと為させ給ひし事ハ瓊  
杵尊の御天降ふ供奉給へる石凝姥命ハ天香語山  
命の御事あり其子天村雲命も其列あり△事傳廿一  
千二十七丁小注ろが如し若て其饒速日命ハ瓊杵  
尊の御天降の後ふ皇祖天神より十種神宝を賜り  
て再天降ふて御在し坐たりけり斯れば右小引る  
天神本紀ハ饒速日命稟天神御祖詔兼天磐船而天降

坐於河内國河上喙峯則遷坐於大和國鳥見白庭山と  
有ハ其時の事ありけり天孫本紀ハ饒速日命の天道  
日女命為妃天上誕生天香語山命御炊屋姫為妃天降  
誕生宇摩志麻治命と有が如く先の御天降ハ天道  
日女命を伴ひ給ひ後の御天降ハ此國ふて御炊屋  
媛を娶しせ給へる趣ふども如此く其條理細やう小  
見え別る事ありければ天神本紀の妄説の中より  
斯る正説を掇得る事も亦然すが古書の徳トクふり有  
ける此を以て天恩穗耳尊の初て天降ふて御在し坐  
ける御時を明しめ奉る事何れも專要と有る御事



ふる者ありき又天神本紀の妄説小方人於て饒速日命を嫡流として其初より天統のニ小支別れ給へる者の如く説成して神武天皇の東征の御事狂を御謀叛の如く申成し奉りて甚も忌しき狂枉説を吐く輩も世に在り然る僻者共ハ丹後風土記をハ何より讀む天孫本紀を如何に見るに根無き傳卷首にも注るが如く此小擧たる一書の文々古事記の傳と其本一ふる事更論無れハ今云限小非ずい甚斜み雖も此小方々の差異有て大小何怜味い甚斜みふむ有ける其ハ記小天照太御神之命以豊葦原之千秋長五百秋之水穂國者我御子正勝吾勝速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也於曼天忍穗耳命於天浮橋多志而詔之豊葦原千秋長五百秋

之水穂國者伊多久佐夜藝豆有祁理告而更還上詣于天照太御神之所見たる此ハ中天より此國の荒振神等の甚く喧擾る狀を見行ハ驚らせ御在り坐り引返し上りせ給へる趣ありけるを此一書小彼地未平矣と有ハ此小當れる事本よりあり次小不須也頗頗凶目杵之國歟と有ハ此大地の全体を見認めせ給へる趣あり頗頗と云ハ此大地を有ハせ御在り坐す神を豊香節野尊と申奉る御名の傳ハ有を天地開闢より以來誰一人見たる者の無き故小唯其の理を以て漢土西戎共小地動の説を唱ふる事ありとも其正



く然有けりとの誰々の推量ふ得定めざる可き今  
此証文を得て此御時の事の状を思ふ高天原の常  
在の動く事無き所御在り坐る大神の坐る所此  
大地の近著で給ふ隨ひて謂ゆる公運云事有て  
射る矢よりも迅速く轉移旋ゆ私運云事有て車軸よ  
りも甚しく頗傾くなりければ此地正に在る所  
然も思えさげけれ地外より見行し給ふ心も甚  
怖おそく思ふて返り奏させ御在り坐る所然  
れば彼地未平矣との其内を見て詔ひ不須也願願凶相  
梓之國歟と詔へる外を見て其形狀を宣せざる

△猶此御天降の時  
世の事ハ下下論定るを見合す  
可き者あり

此ニを相並べて言舉爲させ給へるおび愛れりふ  
も云へば更ふる御事ハ有ける天神本紀ハ臨之  
響彼地未平矣不須也頗傾凶目梓之國歟との有り彼地  
未平ハ弘仁私記ハ曾乃久ハ左也介利と訓て古き  
事ふるを神武天皇戊午年御紀より取て猶聞喧擾之  
響の字を此取て文を成せる者ありて委まかす過  
て却かへり其  
意淺し ○以思兼神妹萬幡豊秋津姫命正書ハ高  
皇產靈尊之女栲幡尊姫有り宝鏡開始章第一一  
書ハ高皇產靈之息思兼神云者有り依る時ハ御紀  
の趣ハ高皇產靈尊の長子を思兼神末女を栲幡尊  
姫命と云ふ傳あり然るハ思兼神ハ申すハ傳十九百  
十一二十三六ハ先輩の説ハ據り古書を参考ハ注せ







胞の義ふ取れるが故ふ其生坐る御<sup>女</sup>の御名何時  
うと漏て傳<sup>つ</sup>ず成めるく其御祖と坐才萬幡豊  
秋津姫命の指て天忍穗耳尊の右神の直<sup>如</sup>く直ふ傳  
れる者ありけし此ハ御紀ハ限らず古事記と雖も然る誤有り迹ハ藝命の御事を此御子者御合高木神之女万幡豊秋津師比賣命生御子天大明命次日子番能迹ニ藝命ニ柱也と有る是ハ必一あり然して其天忍穗耳尊の右神ハ立せ御在  
坐ける思兼神豊幡豊秋津姫命御<sup>夫</sup>婦の御中ふて  
生奉<sup>り</sup>せ給へる女御子ハも傳世ハ一<sup>ニ</sup>十<sup>ト</sup>ハ小舉た  
るが如く此第六一書ハ天忍穗根尊娶高皇産靈尊女  
子栲幡<sup>子</sup>ニ姫萬幡姫命亦云高皇産靈尊兒火之戸幡

姫命<sup>子</sup>ニ姫命而生兒天大明命次生天津彦根火瓊  
杵根尊と有る此栲幡<sup>子</sup>ニ姫命と萬幡姫との間ハ兒  
若くハ女字を脱せり由古史<sup>徴</sup>ハ注るが如くして其  
萬幡姫命も子と姫命も御祖の御名を襲ひたるよて  
其御女の御名と聞り第七一書ハ一云高皇産靈尊  
兒萬幡姫兒玉依姫命此神為天忍骨命妃生兒天杵火  
ニ置瀨命と有る此ハ御祖を萬幡姫と有ハ萬幡豊秋  
津姫命の略あり次ハ勝速日命天大耳尊此神娶丹鷲  
姫生兒火瓊ニ杵尊と有る右の玉依姫命とも丹鷲姫  
命とも申せり即思兼神の御女ハ御在<sup>し</sup>坐て天忍







△安原天皇元年御  
紀小願月幡按皇  
女以欲配大泊瀬  
皇子マ有も配字  
を阿波世色マ訓  
て例あり

織物ハ光澤を出し給ふふどの事を称譽め申せるハ  
こりハ有けめ師ハ為<sup>ナス</sup>て其神の職業と爲て功トよ  
せ給ふ謂ふるハこり<sup>の万葉三卷</sup>但右ハ謂ゆる秋津羽ハ記傳ハ  
夏虫の火虫の衣と有も同意あり古マ漢籍ハ衣の美  
麗クマを虫羽ハ譬言云る有り云くと云れたる如く薄  
ク衣をハ云るふる可し然れども天上の神名ハ然る  
夏虫の譬を取て御名ハ負せむ事ハ思も寄ざる事ハ  
求む可き事云も更あり○配<sup>ハ第ニ一書ハ在も其マ</sup>ハ阿波世色と訓私記  
ハ安波之立と有り然るハ海宮遊行章第五一書ハ  
火ニ出見尊の御在し坐たる所ハ海神則以其子豊玉  
姫妻之<sup>アセマニル</sup>と有るハ阿波世麻都流と訓ハ此其ハ從ハ  
可し<sup>メトリテ</sup>偕正書ハ<sup>メトリテ</sup>娶高皇産靈尊之女栲幡千千姫と有

△是時勝速日天  
忍穂耳尊良海  
本ハ是時天照太  
神子正哉吾勝ニ  
速日天忍穂耳尊  
マ作り但其下ハ  
之字有ハ衍少

り古事記ハ御合高木神之女萬幡豊秋津師比賣命  
と有る此等ハ其自娶とせ給へる方より此ハ他より  
娶とせ奉給ふ方より云るの○爲妃ハ傳廿五<sup>五下</sup>  
見る可し○立于天浮橋ハ古事記ハ於天浮橋多<sup>六下</sup>  
志而と有り第二一書ふる後の御天降の所ハ時居於  
虚天而と有るも思合す可し通證ハ立于天浮橋與下  
書居於虚天意同此以天地相通之<sup>間</sup>聞者猶言雲梯然と  
注されたるハ然る言あり偕傳廿一<sup>九下</sup>ハ注るが如  
く瓊ニ杵尊の御天降の天浮橋の事ハ此正書第四一  
書等ハも見えて上天より高千穂峯ハ架りけり狀ハ



りければ此時も何處に指て架れる所在無て得  
有べくしずふむ有けるを其山あり正よく豊前國の  
彦山ある説を得たりける其ハ西田直養説ハ其山僧  
の古傳ハ昔天孫降臨ハ此山ハ絶頂あり由ハ云傳ハ因テ上宮  
ハ伊弉諾伊弉册ニ柱神を左右ハして中央ハ天忍  
穗耳尊を祀る神名式ハ謂ゆる田川郡忍骨神社是ハ  
り又高皇産靈尊大國主神菊理媛神等の舊社も其山  
中ハ在り彦山ハ云ハ日神の御子の在り山あり義ハ  
り又兄弟岳ハ云ハ高山也此山内ハ在り昔此岳ハの頂  
頭椎大刀ハ云ハ堀出たり今神庫ハ崇秘秘トて人の目

小觸ル時ハ必崇有ガ故ハ昔より其宮を開く事無し  
此山豊前豊後筑前の三國ハ跨うて鎮西第一の高峯  
ありト云ハ此ハ據ト爲テ定めむ事ハ如何あるハ如く  
思ふ人も有あめども天浮橋の架れり根ある所必  
有べきハ右の如く式社ハて立て給へるあど縁の  
所由とも所見ハざるハ長寛勘文ハ引る熊野權現御垂  
跡縁起ハ日本國鎮西日子乃山峯雨降給其体八角留奈  
水精乃石高佐三尺六寸奈留天降給布ハ有ハ二柱御  
祖神の御事あるも此ハ由有て思ゆれば此ハ天忍穗  
耳尊の指て天降ルせ御在り坐むト爲させ給へる舊



△於富是流

跡ふハ有べき三代實録負觀七年二月廿七日己卯豊  
前國從五位上忍骨神授從四位上と所見なり其神劍  
其形をバ摸て一人有つふハ世ハ傳りて源定信朝臣  
の集古十種カ劔部ハ彦山所藏頭椎大刀とて出たる  
是ありと云り借此山あり正しく天忍穂耳尊を祀れ  
る御社も有て右の如く傳記も久カハ傳ハる事なれ  
ども己くより名高き佛地と成れるう古傳の臨  
没ひて詳ろぬふづ有べき甚可惜き事あり○臨  
眺之を富是理氏と訓たり神武天皇三十一年御紀ハ  
及至饒速日命乘天磐船而翔行大虚也眺是郷而降之  
故因目之曰虚空見日本國矣と有ハ眺の一字を然  
訓セたり又其並ハ皇輿迹幸因登腋上喙間丘而迴  
望國狀曰妍哉乎國之獲矣と有る此ハ望字を袁

△を直指ハ強ク  
見を云ふて注  
るハ心を得て考  
ふるハ

富是氏と訓セたり同ト所ふて於ハ袁ハ片假字の相  
違有て何れども難定きを曼行天皇四十年御紀ハ蝦  
夷賊首島津神國津神中略望并之曰と有る望字を於富保  
美氏と訓るハ大見而云事ある可うけられ於ハ  
定めて於保富是理氏の略ある可し然れば此臨眺之  
を富是理氏と云ハ富ハ大の略あり是理ハ進ハて目  
を進よせて見る義と所見たり今俗言ハ物を穿つ  
を富是流と云ハ其甚しきをバ富是久流と云ハ大進  
ハ鑄る義ある此とハ同言ある可し白井宗因説ハ  
於是流と云ハ高きより下を望みて目移りの急ある



△有ハ上ふる天照  
大神の御言ハ有  
残照照景横照  
之神者ト有る其  
等の邪神の各所  
を得て荒振<sub>ヲ</sub>  
狀是あり彼地加  
能久迹波<sub>ト訓</sub>  
此四字

を云あり音楽の中ハも於是理吹<sub>ト云</sub>事有り氣移り  
の上ハ就て此名有りと云々ト一の考ハ備ふ可らハ  
こ<sub>ハ</sub>口訣ハ臨眺者傾視也<sub>ト云</sub>注<sub>ハ</sub>重遠ハ頭窺視也  
云<sub>ハ</sub>強ク見<sub>ル</sub>を富是流<sub>ト云</sub>云<sub>ハ</sub>云<sub>ハ</sub>甚能<sub>ク</sub>此ハ  
叶<sub>ハ</sub>へりける又通證ハ屈原離騷忽臨眺夫舊郷<sub>ト云</sub>  
○彼地未平矣公私記ハ曾乃久尔八左也介利<sub>ト訓</sub>ハ  
れども言足はず古事記ハ伊多久佐夜藝<sub>ト有</sub>邪理<sub>ト</sub>  
有<sub>ハ</sub>依<sub>テ</sub>訓<sub>テ</sub>む<sub>ハ</sub>言<sub>ハ</sub>意<sub>ト</sub>調<sub>リ</sub>て愛<sub>タ</sub>ラ<sub>ハ</sub>可<sub>ク</sub>  
く<sub>ハ</sub>侍<sub>ル</sub>む但此ハ伊多久ハ當<sub>ル</sub>字<sub>ハ</sub>非<sub>レ</sub>れども訓添  
て語勢<sub>ヲ</sub>調<sub>ハ</sub>可<sub>ク</sub>記傳十三<sub>ト五</sub>ハ伊多久ハ痛<sub>アリ</sub>万  
葉<sub>ハ</sub>多<sub>ク</sub>此字<sub>ヲ</sub>書<sub>キ</sub>又甚<sub>ハ</sub>字<sub>ハ</sub>疾<sub>ハ</sub>字<sub>ハ</sub>も書<sub>ラ</sub>七卷

三十<sub>ト</sub>ハ大<sub>ハ</sub>も有<sub>リ</sub>又伊多久<sub>ノ</sub>の<sub>ハ</sub>も云<sub>ハ</sub>遠<sub>ハ</sub>飛鳥宮  
六<sub>ト</sub>ハ太子御歌ハ伊多那加婆<sub>ト有</sub>痛<sub>泣</sub>者<sub>ハ</sub>あり儲<sub>ハ</sub>万  
葉<sub>ハ</sub>伊刀<sub>ト云</sub>も痛<sub>ハ</sub>字<sub>ハ</sub>甚<sub>ハ</sub>字<sub>ハ</sub>を書<sub>テ</sub>同意<sub>アリ</sub>佐夜藝  
豆<sub>ハ</sub>中卷白禱原宮段<sub>ハ</sub>も葦原中國者伊多玖佐夜藝  
帝阿理祁理<sub>ト有</sub>其<sub>ヲ</sub>書<sub>紀</sub>ハ聞喧擾<sub>之</sub>郷音<sub>ト書</sub>て  
此<sub>ハ</sub>云<sub>ハ</sub>左<sub>ハ</sub>椰<sub>ハ</sub>覓<sub>ハ</sub>利<sub>ハ</sub>氣<sub>ハ</sub>離<sub>ト有</sub>氣<sub>ヲ</sub>今<sub>本</sub>ハ奈<sub>ハ</sub>作<sub>ラ</sub>ハ決  
めて誤<sub>アリ</sub>此<sub>ハ</sub>奈<sub>ハ</sub>離<sub>ハ</sub>ハ言<sub>ハ</sub>調<sub>ハ</sub>ず左<sub>ハ</sub>椰<sub>ハ</sub>覓<sub>ハ</sub>利<sub>ハ</sub>万  
葉<sub>ハ</sub>有<sub>ハ</sub>字<sub>ヲ</sub>添<sub>テ</sub>書<sub>ク</sub>格<sub>ノ</sub>言<sub>ハ</sub>て耶<sub>ハ</sub>左<sub>ハ</sub>椰<sub>ハ</sub>岐<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>ト云  
意<sub>アリ</sub>又同段伊須氣余理比賣命の御歌<sub>ハ</sub>加<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>布<sub>ハ</sub>加  
牟登<sub>ハ</sub>許<sub>ハ</sub>能<sub>ハ</sub>波<sub>ハ</sub>佐<sub>ハ</sub>夜<sub>ハ</sub>牙<sub>ハ</sub>流<sub>ハ</sub>万<sub>ハ</sub>葉<sub>ハ</sub>二十九<sub>ト</sub>ハ小<sub>ハ</sub>竹<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>葉<sub>ハ</sub>者<sub>ハ</sub>三



△也字良海本  
兵小作れも羅  
出生章第六書  
か不須也有れ  
ハ笑ハ誤り此言  
己

山毛清尔乱友六十二御山毛清落多藝都古今集小  
小竹之葉の佐夜久霜夜をふど有る如く物の音の喧  
しく躁しき事あり即此佐夜藝人下道速振荒根國  
神等之多在り有る是あり借此處有祁理詔はる  
天浮橋より此國の狀を聞着し視行して痛喧擾がて  
有けるよふど歎き給へる御辞あり採と有る信ふ然  
る説あり其所此文を引れたるは未平を右の神  
武天皇御紀に依て左柳翫利氣離と訓れた  
るも面白く又通證の○不須也ハ伊那と訓あり傳十  
未平喧競也と見ゆ  
百七廿一五百下ハ委ハ注せり○頗頗ハ下ハ頗頗  
也此云歌志と有り但也字ハ衍あり良海本の無

從ふ可し此言ハ神世七代章第二一書豊斟國主尊の  
亦御名を豊香節野尊と申奉る小大ハ所以有る事ふ  
り傳廿一此言ハ百下ハ注るが如く古事記八千予神御歌  
小夜麻登能比登母登須ニ岐宇那加夫斯那賀那加佐  
麻久と有る頃宇那加夫斯を記傳ハ頃頃あり俗ハ下  
より上の勝て頃くを加夫久と云是あり此ハ頃を垂  
頃もふて泣く狀を云ふ借上ハ一本薄と置るハ一本  
立るく頃く意ハ連けたりと云れたるが如く低頗  
頃ハ物思ふ時ハ低個給ふの形狀を薄の打頃くハ比ハ給へり  
天智天皇三年御紀ハ一宿之間稻生而穗出其且垂ハ穎



而熟明日之夜更生一穗と有る垂穎を加夫斯氏と訓  
るが此ハ四神出生章第十一書ハ多理富と訓は  
字ハて稻穂の垂るハ穗末の打頃く事あれハ言ハ別  
ハして意ハ一ハ歸る者あり散木集ハ稻の頃くを見  
て思束ふ誰ハ袖の濃ハ引重ハ法師子の稻加夫斯初  
けハと有も右ハ同ハ鴨長明四季物語月十一條ハ鳥帽子  
打頃くたる加夫斯カタチノカ形愛ハ者あり可ハ徒然草百五段  
ハ加夫斯形ふと甚宜ハと見え云ふと人の形ハ  
加夫斯ハ云ハ直ハと云ハ斜ある姿を云ハ聞元  
なり偕又此の頗頃を或書ハ引るハ加夫久と訓る

ハ此ハ歌ノ志と有る訓注ハ違ハれども然も訓ハ  
字ふるが故ハめり若ハ釋ハ先師説曰頗頃者偏頗之  
義也と注ハ纂疏ハ不平正也と注ハて給ハる言の  
釋ハ然る事あれハ其頗頃ハ云ハ事實ハ於てハ昔  
より得て注せる人ハ非ずふハ有ける唯記傳十三下六  
ハ頗頃ハ國未成堅ハずして頃ける處有ハと云ハ  
り此ハ彼大ハ穴牟遲與ハ名毘古那二柱神相並作堅  
此國と有る頃間ハて未作堅ハ終る程ふる可ハと  
云れたるハ近寄ハハ説ハハ有ける然れども此  
事の有を見行ハ敬馬ハ御在ハ坐ハ大御言ハ未  
心著セざりハ我ハ此説ハ起す基本此ハ在る



△又字鏡小宅笑  
告及蘭也寧也釋  
也取也菜也加不之  
て有も頃すも同言  
る可も物を取  
け寄る意ふあり

事あり又此天忍穗耳尊の天降る世御在り坐けり頃  
間を二柱神の國作の程と見られしあどか千石の大  
活眼ありけり其事の然る由ハ 借天地の全体ハ  
右で十五下ハちり考合す可し 天ノ云ハ日の事ハして世界の中央ハ在り大地及五  
星ハ其周圍を旋る事允一年ハして本ハ復るあり是  
國常立尊の掌とせ御在り坐す御事ハして天學家ハ  
謂ゆる公運是なり然るて豊國主尊と申奉る神御在  
り坐す此ハ其公運を爲す内ハも自轉有て晝夜を成  
し給ふ此を私運と云ふ即豊國と申す豊ハ動字の義  
ハして謂ゆる地動是なり如此く天日ハ相對して大  
地ハ循環環故ハ地中の水氣薰満ち大虚ハ變動して

地外を圍ひあり此就て豊組野尊豊斟野尊又ハ豊  
雲野神と申す御名御在り坐り又浮經野豊買尊ハ聞  
えさするハ此大地ハハも虚空の大氣ハ兼て浮る者  
あり故浮經野と云ふ然して浮經る内ハ晝夜を爲つ  
るも一日二日と更行く故ハ豊買とハ申すあり良  
海本ハ亦曰浮經野尊亦曰豊買尊と有て二名ハ分  
たりも意ハ同し事あり同本ハ右の豊齧野尊の御名  
ハ無して豊齒絲野尊と申す御名坐り齒絲ハ波斯と  
訓づくハ豊走主の義ハして大地の動頃ハつるも間  
断無く往廻るを云めり又國見野尊を良海本ハ國







セヨト同ノ意ふるが其ハ國の汚穢ふハ一ノミテ狀を見  
行して惡ミ給へる大御言あるを此ハ其國を汚穢ハ  
リツて惡おせ給へるハ有べし此國の頗頗  
狀を嫌ハせ給へるふて是其天降り御在り坐ざる所  
以ふるむ有ける此言義ハ己ハ傳十百七十ハ注セリ  
テハ一〇乃更還上トハ天浮橋ハ御立り御在り坐て  
國形を臨睨り見行り御在り坐なる任ハ此國ハ御  
在り坐り著せ給はずして虚天より引返り上りて御  
在り坐す由あり〇具陳不降之狀トハ皇祖天神の御  
許ハ其天降り御在り坐ざる其件トハ奏給ふあり

カシ アマテラス オホミカミ。マタツカヒテタケミカツチノカミ  
故天照太神復遣武甕槌神  
ト フ ヌミノカミトナノマツ ユキテコトムケタマフトキニノフタハシラ  
及經津主神先行馳除時ニ  
カミ アマクダリツキテイツモノクミノスナハチトヒ オホ ナ ムゲノカミニ  
神降到出雲倭問大己貴神  
タマハク。イマシ ラ コノ クニ タテマツラム アマツカミニ ヤ イナヤトヒ玉ハ  
曰汝將此國奉天神耶以不  
ミコタマサク アガ コト シロヌシノカミ。トリノアツビシテ  
對曰吾兒事代主射鳥遊遊



在<sup>アリ</sup>三<sup>ミ</sup>津<sup>ツ</sup>之<sup>ノ</sup>碕<sup>キ</sup>今<sup>イマ</sup>當<sup>マサニ</sup>問<sup>トヒ</sup>以<sup>テ</sup>報<sup>カヘリ</sup>之<sup>コト</sup>  
ツカヒテ ツカヒテ トミタマハロコメマラサク アマツ カミノ マラ  
 乃<sup>スナハチ</sup>遣<sup>ツカヒテ</sup>使<sup>トミ</sup>人<sup>タマハロ</sup>訪<sup>コメ</sup>焉<sup>マラサク</sup>對<sup>アマツ</sup>曰<sup>カミノ</sup>天<sup>マラ</sup>神<sup>マラ</sup>所<sup>マラ</sup>  
コハシノ ナリ サラムマト タテマツテ マツキロカレ オホ ナ ムチノ カミロ モテ  
 求<sup>マテ</sup>何<sup>スコト</sup>不<sup>サロ</sup>奉<sup>コメ</sup>歟<sup>マツリキ</sup>故<sup>フタ</sup>大<sup>ハミ</sup>己<sup>ミ</sup>貴<sup>ノ</sup>神<sup>カミ</sup>以<sup>レ</sup>  
ノホリテ アメニ カヘリコトヲモシ テ マラシテ マラサクノ アヒハラノ ナカツ  
 其<sup>ソノ</sup>子<sup>ユ</sup>之<sup>ノ</sup>辭<sup>ノ</sup>報<sup>マテ</sup>乎<sup>コト</sup>二<sup>フタ</sup>神<sup>ハミ</sup>二<sup>ニ</sup>神<sup>カミ</sup>乃<sup>ニ</sup>  
 昇<sup>ノホリ</sup>天<sup>テ</sup>復<sup>マラシ</sup>命<sup>テ</sup>而<sup>マラ</sup>告<sup>サク</sup>之<sup>ク</sup>曰<sup>アヒ</sup>葦<sup>ハラ</sup>原<sup>ノ</sup>中<sup>ナカツ</sup>

國<sup>クニ</sup>皆<sup>ミナ</sup>已<sup>ス</sup>平<sup>ニ</sup>竟<sup>コトムケテ</sup>

故<sup>コト</sup>天<sup>アメ</sup>照<sup>ノ</sup>太<sup>ニ</sup>神<sup>カミ</sup>復<sup>マテ</sup>遣<sup>コト</sup>武<sup>タケ</sup>甕<sup>ツツ</sup>槌<sup>ツツ</sup>神<sup>カミ</sup>及<sup>ト</sup>經<sup>ツツ</sup>津<sup>ツツ</sup>主<sup>ツツ</sup>神<sup>カミ</sup>先<sup>マテ</sup>行<sup>コト</sup>駈<sup>ツツ</sup>除<sup>ツツ</sup>之<sup>コト</sup>有<sup>リ</sup>  
る 故復の三字ハ一も上ハ天照太神勅天推彦曰豊葦  
 原<sup>ツツ</sup>中<sup>ツツ</sup>國<sup>ツツ</sup>是<sup>ツツ</sup>吾<sup>ツツ</sup>兒<sup>ツツ</sup>可<sup>ツツ</sup>王<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>地<sup>ツツ</sup>也<sup>ツツ</sup>然<sup>ツツ</sup>慮<sup>ツツ</sup>有<sup>ツツ</sup>殘<sup>ツツ</sup>賊<sup>ツツ</sup>強<sup>ツツ</sup>暴<sup>ツツ</sup>橫<sup>ツツ</sup>惡<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>神<sup>ツツ</sup>  
者故汝先往平之乃賜天鹿兒弓及天真鹿矢遣之有  
 者<sup>ツツ</sup>故<sup>ツツ</sup>汝<sup>ツツ</sup>先<sup>ツツ</sup>往<sup>ツツ</sup>平<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>乃<sup>ツツ</sup>賜<sup>ツツ</sup>天<sup>ツツ</sup>鹿<sup>ツツ</sup>兒<sup>ツツ</sup>弓<sup>ツツ</sup>及<sup>ツツ</sup>天<sup>ツツ</sup>真<sup>ツツ</sup>鹿<sup>ツツ</sup>矢<sup>ツツ</sup>遣<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>有<sup>ツツ</sup>  
る 汝先往平之有ハ照應せる文あり然レハ其天推  
 彦<sup>ツツ</sup>神<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>允<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>の<sup>ツツ</sup>結<sup>ツツ</sup>め<sup>ツツ</sup>ハ<sup>ツツ</sup>在<sup>ツツ</sup>る<sup>ツツ</sup>此<sup>ツツ</sup>而<sup>ツツ</sup>歌<sup>ツツ</sup>辭<sup>ツツ</sup>今<sup>ツツ</sup>号<sup>ツツ</sup>夷<sup>ツツ</sup>曲<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>有<sup>ツツ</sup>ハ  
續ベテ文ふる事灼然ト然る時ハ右ハ注せる既而天  
 照<sup>ツツ</sup>太<sup>ツツ</sup>神<sup>ツツ</sup>以<sup>ツツ</sup>思<sup>ツツ</sup>兼<sup>ツツ</sup>神<sup>ツツ</sup>妹<sup>ツツ</sup>萬<sup>ツツ</sup>幡<sup>ツツ</sup>豐<sup>ツツ</sup>秋<sup>ツツ</sup>津<sup>ツツ</sup>姬<sup>ツツ</sup>命<sup>ツツ</sup>配<sup>ツツ</sup>正<sup>ツツ</sup>哉<sup>ツツ</sup>吾<sup>ツツ</sup>勝<sup>ツツ</sup>之<sup>ツツ</sup>速<sup>ツツ</sup>



日天忍穗耳尊為妃令降之々有る較略ハハも必其所  
小置べき文ありざる事を曉る可く借右ハ天稚彦<sup>神</sup>  
天降させ御在り坐ける大御政<sup>神</sup>申すハ此卷首あり  
云ふが如く古事記ハ所見なる如く其始天忍穗耳尊  
を天降し奉りて給ひし<sup>神</sup>ども此國ハ殘賊強暴横惡  
之神者有て甚く喧擾る為ハ此國ハ御在り坐し著  
せ給ふ事御在り坐す<sup>神</sup>て虚天より引返して天上ハ  
昇らせ御在り坐て復命奏させ給へり此ハ就て  
其奏し給へる仕ハ此國神の消息を巡察しめさせ給  
ふ可<sup>神</sup>大命を令持て初て天穗日命をふひ天降させ

給へりける然るハ其神ハ大國主神を媚和し聞えさ  
せ御在り坐し<sup>神</sup>て為て其復奏<sup>神</sup>の御事も甚く後れハ  
く<sup>神</sup>バ此度ハ天神より更ハ征伐の御使と定めて天  
稚彦神を天降し遣給ひけるあり然るを其神ハハも  
大命の御旨を忘れて荒振神を言向る事を任<sup>神</sup>て為す  
國神の女を娶りて不忠誠りけれバ謂ゆる高津鳥の  
殃ハ依て立所ハ返矢の御討めハ遇奉りして此ハ身  
亡ふれハなり然る時ハ此一書ハ天忍穗耳尊の御天  
降を其ハ並べ置る事ハハも甚<sup>神</sup>謂れ無き事ありけり  
其天稚彦神を遺され<sup>神</sup>ハ彼荒振神を征伐せ給ふ



爲て天降させ給へるふこり有けれ其征伐の神ハ七  
ひて敵と有る荒振神ハ其任ふ存りて在る國ハ天降  
け奉らせ給ふと云理ハ且ても無き事ふまじり其  
上此ハ故復遺の三字有ハ天稚彦神の件より承る所  
因らる有けれ天忍穗耳尊を合降之と有るハ且て  
も打合べき所ふまじりて右の支の混れある事  
をも思定む可き事あるハ右の混れハ此巻首ハ  
ハ然しハ無用は事の如くハ在れども本文より  
究る時ハ其説を立るふも浮て聞ゆる故ハ今亦  
此論ハ及備此二柱神の平國の事迹ハ正書第  
二一書等ハ元で委曲ハ在る此傳ハ異ある事ハ非

りけし甚く事略なる書られ状ハて其平國の御時  
の標目とも言計ふる事共あり此時の御政の元ての  
状ハ一も己ハ傳廿一四百ハハ委く論定めたる事  
ハ一在けれハ今云限ハ非すと雖も余事ハ姑く措て  
此ハ故大己貴神以其子之辞報乎二神二神乃昇天復  
命而告之曰葦原中國皆己平竟と有て此ハ終めたる  
ころ甚く事足らざる傳ハ有けれ然るハ右ハ以其  
子之辞報乎二神二神乃昇天復命云ハ其事代主神建御  
名方神の申給ふ辞を以て其父大神のより二柱神ハ  
御答申させ給へるハて大己貴神の申させ給ふ事ハ



此外不在て天神御子ハ現事顯事を事避奉りて  
己命ハ神事幽事を治させ御在り坐むと云ふ御願言  
あり次ハ其大神の住せ御在り坐べき宮を天神御  
子の天津日嗣所知食む大宮の如く造りて治めさせ  
御在り坐しめ給ふ可き由の御願言あり此二事ハ二  
神の御心と心得ふ計り聞えさせ<sup>重</sup>ける御  
事あり故ハ此ハ天上ハ參昇らせ給ひて天神  
の掟させ給ふ可き御命を請ふ御在り坐なるありけ  
り然りて其天神の定めさせ給ふ所も一ハ其神の請  
奉らせ給ふ<sup>所ハ依て給へり</sup>如くありければ其御命を持りて二度天

降らせ給ひ皇祖天神の御趣の任ハ其大己貴神を治  
め聞えさせ給ひ其御政を畢させ御在り坐ける後ハ  
悉くハ此葦原中國を周流らせ給ひ荒振神等を神攘  
ひハ攘給ひ神和しハ和給ひ然後ハ皇祖天神の大御  
許ハ全くの復奏し給へるあり有ける然るハ此傳ハ  
天神御子の御天降の御事を委しく書し奉りむとて  
其事ハ移る因ハ置る所ふるが故ありと所見スんて  
の事實甚く鹿間ふれども正書第一二書及古事記等  
の傳ハ合せて深く其事を正し辨へずハ有べく  
ず故今ハ其委しきまでハ及ハざる事ありども事  
の狀を注すとしてハ<sup>傳</sup>より傳ハるを取て其事を徹



す可き者あり無用ふ。○故天照太神復云くハ正書小  
事も思捨多事勿れ。ハ是後高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者ト  
見え第一書ハ唯ハ天神トのミ有リ古事記ハ  
於是天照太御神詔之亦遣曷神者吉尔思金神及諸神  
白之ト所見ハリ此を以て其時の神議の趣を見奉り  
知べきあり傳廿一四百三十九丁見る可し。○武甕槌神及經  
津主神ト有リ此次第ハ佗の傳トハ異あり正書ハ  
ハ右の文ハ續テ食日磐裂根裂神之子磐筒男磐筒  
女所生之子經津主神是將住也時有天石窟所住神稜  
威雄走神之子甕速日神甕速日神之子燂速日神燂速

日神之子武甕槌神此神進曰豈唯經津主神獨爲丈丈  
而吾非丈夫者哉其辞氣慷慨故以即配經津主神令平  
葦原中國ト有テ傳廿一四百三十九丁注云カ如キ經津主  
神を大將軍トシ武甕槌神を副將軍ト爲させ御在ト  
坐て天降させ給へる由ハ此一書の外ハ第二一書  
ハ天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國ト見え迂  
却崇神詞ハ是以天津神能御言以氏更量給氏經津  
主神命健雷命ニ柱神等氏天降給氏ト有テ悉ル合リ  
者あり然るハ古事記ハ天鳥船神副建御雷神而  
遣ト見えハ此ハ天鳥船神を郷導者ト爲テ其征伐







國者言趣和其國之荒振神之者也何至于八年不復奏  
又國避段小故建御留神返參上復奏言向平葦原中國  
之狀白檮原宮段小故如此言向和平荒夫琉神等退撥  
不伏人等黑田廬戶宮段小於針間氷河之前居忌笥而  
針間爲道口以言向和吉備國也日代宮段小倭建命の  
山神河神及穴戸神皆言向和而參上又ハ尔天皇亦頻  
詔倭建命言向和平東方十二道之荒夫琉神及摩都樓  
波奴人等而又幸于東國悉言向和平山河荒神及不伏  
人等又悉言向荒夫琉蝦夷等亦平和山河荒神等又越  
科野國乃言向科野之坂神ふと見えて言向又言趣と

も作て言ハ借字小して事向の義あり万葉二十  
五  
小も知波夜夫流神乎許等年氣ふと有を此御紀亦  
平字を書て年氣と訓る所のふ多在れば此ハ私記  
の先ある方の訓小従ひて事向とぞ訓の可記傳十  
ト小言趣の言ハ借字事小して事依事避ふとの事三卷十  
ト年氣ハ年加世小して背ける者を此方へ令向る意ふ  
り背向ハ此裏ふて彼方へ向  
ふり云神々有る説小依れり○二神降到出雲ハ正書  
小二神於是降到出雲國五十田狹之小汀則拔十握劔  
植於地踞其鋒端而々有る其略説ふる由傳廿一五百  
小注をを見て曉五百可五百第一二書小も二神降到出雲  
五十田狹之小汀而々見え古事記五百も是以此二神降



到出雲國伊那佐之小濱而拔十掬劍逆刺立於浪穗  
坐其劍前之有て此時小威儀を示し給へる御事之へ  
御在り坐けりるを皆が事略されたり○汝將此國  
奉天神耶以不心奉避天神耶以不の義を正書不問  
大己貴神曰高皇產靈尊欲降皇孫君臨此地故先遣我  
二神馭除平定汝意如何當須避不之見え古事記不  
殊不委すく天照太御神高木神之命以問使之汝之  
宇志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝  
心奈何之有て此宇志波久之云之所知之云と大  
小意味の差異有る事已傳廿一五百丁委申小説

分たを此小味可也○吾兒事代主神字を訓添  
る事習ふ○射鳥遊遊良海本小遊字無私記  
小射鳥遊之作て止利乃安曾比之有り即正書小以  
釣魚爲樂或曰遊鳥爲樂之見え古事記亦爲鳥遊取  
魚而之有味れば此も釣魚の方をハ落せるありけり  
此射鳥遊遊の事八傳廿一五百丁注せり口説小遊  
唯字の注のこあり通證小詩拍舟以遊以遊之云事  
有り然れハ始ハ射鳥遊之有りむを後ハ熟字小依て  
神○三津之碕ハ正書小ハ在於出雲國三穗三穗  
美之碕古事記ハ往御大之前未還來之有れが此ハ  
大不異なる説の如ク之雖も強ハ必然ハ云



本よりけり出雲風土記の島根郡不在神祇官社小御  
津社申す有を抄不在加賀郷水浦本宮社是也又云  
抄又御津濱廣二百八歩有百姓之家又三島生海之所見  
是也其水浦の地海の方小属即北浦秋鹿郡在て接け  
る所ありと云す又神名式小指縫津郡御津神社風土  
記にも御津社と有を抄今指縫郷三津浦神社是也  
又有て此處に御津島生祭御津濱廣三十八歩と有る  
共小北海に属す地あり其島根郡あり此指縫郡  
あり其令知の故も雖も熟思ふ小傳廿二五百三  
小注より如く此時の事迹は正しく三穂之碕あり

日事今云限小非を右の二の御津濱其事代主  
神の常小漁獵の爲小御在坐たる所あり依て其  
地名の成り且此の故事をも一説小三津之碕の  
傳れり者より思ひけり其三津と云地名の  
此神小申有る事ハ傳三十千二十小注より如く風土  
記小仁多郡三津郷郡家西南廿五里大神大宛持御子  
阿遲須枳高日子命御須髮八握子生晝夜哭坐之辞不  
通略尔時祖命御子乘船而率巡八十島宇良加志給鞆  
猶不止哭之大神夢願給告御子之哭由夢尔願坐則夜  
夢見坐之御子之辞通則寤問給尔時御津申略故云三



津神龜三年と所見なりければ此時御船改字三澤に乗せ奉りて八十島を率巡坐し時の迹ふとふよ依て後小も常小御在し坐て鳥魚の遊を此小爲させ給へる事の屢御在し坐けりふる可し又攝津國の三津ふとも此神小由有る可しむ事ハ神名式小東生郡阿遲速雄神社と申すハ此神の御在し坐し難波古圖の味耜崎之云地谷の有ふどの久縁ふと聞ゆをも考合す可し但古事記ハ高津宮段ハ於是太后太恨怒載其御船之御細柏者悉投擲於海故号其地謂御津前也と見えたりれども号其地謂御津前也と後ハ加れたる説ふ可し其三十年御紀ハ則其所採御網葉投於海而不著岸時故号散葉之海○今當問以報曰葉濟也と有るハ理甚能通えたり

之ハ正書ハ當問我子然後將報と有る同ハ古事記ハ僕者不得白我子ハ重南言代主神是可白云と所見て此ハ大己貴神より其御子神等ハ問して其返言を聞えさせ奉りむとあるを其ハ天神の大御使の直小問セ給ふ可き由を聞えさせ給へる趣あり其小就ての説此第ニ書の此小當る所小疑汝ニ神非是吾處來者故不須許也於是經津主神則還昇報告と有るハ疑無小非ず傳卅一四百九十三丁六百二十四丁小論へるを見り可きあり○乃遣使使入訪焉ハ正書小故以熊野諸手船亦名天載使者稻背脛遺之而致高皇產靈尊勅於



事代主神且問將報之辭と見え古事記ハ故尔遣天  
鳥船神徴來八重事代主神而問賜之時と有ハり○天  
神所求何不奉歟ハ私記ハ所求を已此太万不止古呂  
乎と有リ求ハ乞字の義ハて万葉七十八欲得暴登  
乞者令取ハ三丁ハ玉梓之道去暴跡爲乞兒九十七ハ  
不乞尔鑑左倍奉ふと云ふ是ハり何不奉歟ハ何不奉  
避歟の義ハり正書ハ時事代主神謂使者曰今天神有  
此借問之勅我父宜當奉避吾亦不可違因於海中造ハ  
重蒼柴籬踏船柁而避と有テ至誠至忠ハ爲テ天神の  
勅命ハ奉對テ一句ある御心ハ御在リ坐テ御事石

小何歟と有ハ甚く慷慨マせ給ヘる御言ハるを見奉  
り知ベきあり古事記ハも語其父大神言恐之此國者  
立奉天神之御子即踏頌其船而天逆乎矣於青柴垣打  
成而隱也と有テ此ハも其御志操の程ハ落も無く所  
見マせ給ヘりけテハヤ○故大己貴神以其子之辭報  
乎二神と有リ此御事正書ハ故大己貴神以其子之辭  
白於二神曰我怙之子既避去矣故吾亦當避如吾防禦  
者國內諸神必當同禦今我奉避誰敢有不順者と所見  
乃リ分ケ如シ但古事記ハ故尔問其大國主神今汝子  
事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白之亦我子











奉<sub>レ</sub>給<sub>フ</sub>事<sub>ノ</sub>御在<sub>リ</sub>坐<sub>ケル</sub>其御命<sub>ヲ</sub>持<sub>テ</sub>天上<sub>ニ</sub>  
還<sub>リ</sub>傳奏<sub>セ</sub>給<sub>ヘ</sub>る<sub>事</sub>ありけり其續<sub>キ</sub>小<sub>ノ</sub>故更<sub>レ</sub>條<sub>ノ</sub>  
而勅<sub>之</sub>夫汝所治<sub>ル</sub>顯露<sub>ノ</sub>事宜<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>吾孫<sub>ノ</sub>治<sub>ル</sub>之<sub>レ</sub>宜<sub>ハ</sub>是<sub>レ</sub>吾孫<sub>ノ</sub>治<sub>ル</sub>  
之<sub>レ</sub>汝則可<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>治<sub>ル</sub>神事<sub>又</sub>汝應<sub>レ</sub>住<sub>ル</sub>天日隅宮<sub>者</sub>今當<sub>レ</sub>供造<sub>中</sub>  
又當<sub>レ</sub>主<sub>ル</sub>汝祭祀<sub>者</sub>天穗日命<sub>是</sub>也<sub>ト</sub>所見<sub>ル</sub>此<sub>三</sub>條<sub>ハ</sub>  
即大己貴神<sub>より</sub>皇祖天神<sub>ニ</sub>請<sub>フ</sub>奉<sub>ル</sub>給<sub>ヘ</sub>る<sub>事</sub>條<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>  
事傳<sub>卅一</sub><sub>六百三十一</sub>小<sub>ノ</sub>注<sub>セ</sub>る<sub>事</sub>如<sub>ク</sub>古事記<sub>ハ</sub>右<sub>ノ</sub>  
の顯露<sub>ノ</sub>事<sub>ト</sub>神事<sub>ノ</sub>の<sub>一</sub>條<sub>ハ</sub>傳漏<sub>レ</sub>れ<sub>ル</sub>け<sub>レ</sub>  
れ其天日隅宮<sub>の</sub>一條<sub>ハ</sub>唯僕<sub>住</sub>所<sub>者</sub>如<sub>ク</sub>天神御子<sub>之</sub>天  
津日繼<sub>所</sub>知<sub>之</sub>登<sub>陀</sub>流<sub>如</sub>天之御巢<sub>而</sub>於<sub>底</sub>津石根宮柱

布斗斯理<sub>於</sub>高天原<sub>永</sub>木多迦斯理<sub>而</sub>治<sub>賜</sub>者僕<sub>者</sub>於<sub>百</sub>  
不足<sub>八十</sub>垣手<sub>隱</sub>而侍<sub>ト</sub>所見<sub>ル</sub>此<sub>ハ</sub>天津日繼<sub>所</sub>知<sub>之</sub>  
之<sub>ト</sub>有<sub>ク</sub>右<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>謂<sub>ユ</sub>る<sub>事</sub>顯露<sub>ノ</sub>事<sub>ハ</sub>當<sub>ル</sub>僕<sub>者</sub>於<sub>百</sub>不足<sub>八十</sub>  
垣手<sub>隱</sub>而侍<sub>ト</sub>有<sub>ク</sub>即右<sub>ノ</sub>神事<sub>ハ</sub>當<sub>ル</sub>此<sub>ハ</sub>此<sub>二</sub>  
を相<sub>兼</sub>て天神<sub>ハ</sub>申請<sub>セ</sub>給<sub>ヘ</sub>る<sub>事</sub>灼然<sub>ク</sub>ふ<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>ける  
若<sub>ク</sub>今<sub>一</sub>條<sub>の</sub>又當<sub>レ</sub>主<sub>ル</sub>汝祭祀<sub>者</sub>天穗日命<sub>是</sub>也<sub>ト</sub>云<sub>件</sub>  
ハ其記<sub>ハ</sub>如此<sub>之</sub>白<sub>而</sub>於<sub>出</sub>雲國<sub>之</sub>多藝<sub>志</sub>之<sub>小</sub>濱<sub>造</sub>天  
之御舍<sub>而</sub>水戸神<sub>之</sub>孫櫛八玉神<sub>云</sub>と有<sub>ル</sub>此<sub>事</sub>小<sub>ノ</sub>就  
て傳<sub>卅一</sub><sub>七百三十一</sub>小<sub>ノ</sub>注<sub>セ</sub>る<sub>事</sub>如<sub>ク</sub>其櫛八玉神<sub>ト</sub>  
聞<sub>ユ</sub>る<sub>事</sub>天穗日命<sub>の</sub>后神<sub>ハ</sub>ト<sub>モ</sub>神魂伊豆<sub>乃</sub>賣神<sub>ト</sub>



申して即水戸神の御事あり其御子天夷鳥命其子伊  
佐我命即櫛八玉神の坐が故小天穗日命の水戸神  
少御孫の渡り給へれば天穗日命の祭祀を主  
りて給ふ祖業を相承て仕奉りあり右等の事共  
を其始不及びて思ふも此二神の中間に復命  
して皇祖天神の處分を請奉りて給ふ御事の御在  
坐ける事決り者かふに有ける此を以て時高皇產靈  
尊乃還遣二神勅大己  
貴神曰今聞汝所言深有其理と詔給ひて其事を以て  
大己貴神の所言を探索下り得有べりて事々を曉  
あり若て二神ハハハ皇祖天神の大命を載持し再此  
國小天降りて御在坐坐て其御趣の如く大己貴神を

治聞えさせ給ひて万の事落も無く旋させ給へりける  
小天神より懇懇ありける御會釋の御在坐けるを  
大己貴神の深く辱ふに奉りて御在坐て平國之廣  
予託て岐神を二神の薦め聞えさせ給ひりける此ハ  
此より其二神ハハも專此國中に在り有ゆる彼殘  
賊強暴横惡之神を悉く言向させ御在坐ける  
即正書ふ於是二神誅諸不順鬼神等一云二神遂誅邪  
神及草木石類皆  
已平了其所不服者唯星神香二此背男耳故加遣倭文神  
建葉槌命者則服故二神登天也倭文神此云斯圖梨俄  
未果以復命と見え第一書ふも故經津主神以岐神  
爲郷導周流削平有逆命者即加斬戮歸順者仍加褒美



と見えたる是が二神終の復奏の時ふりける此傳と  
古事記といハ大己貴神の御事訖ふ直ハ復奏させ給へ  
る者の如く有れども其ふてハ上ハ皇祖天神の葦原  
中國ハ残賊強暴横惡之神有と詔ひて征伐の御使を  
追次て降させ給へる結ハ成ざるあり右の外ハも  
祝詞共ハ其差別を能正されたりけり大被詞ハ國  
中ハ荒振神等ハ神問志賜神掃ニ賜此語問志磐  
根樹立草之垣葉ハ語止此所見たるを後釋ハ此所  
神掃云ハ荒振神ハ係り神問云ハ主ハ大名持神  
ハ係り然れハ云ハ神問志賜荒振神等波

神掃ニ賜此と分て有べき事ありハ唯荒振神等との  
之有ハ大名持神ハ荒び給へる如聞えて如何あれど  
も語を省きて如此も云べきハ略と云れたり又迂  
却察神詞ハ是以天津神能御言以此更量給此經津  
主命健雷命ニ柱神等ハ天降給此荒振神等ハ神攘ニ  
給此神和ニ給此語問志磐根樹立草之片葉ハ語止此  
と有る此ハ右の例と同くして神攘ニ給此ハ荒振  
神等ハ係り神和ニ給此ハ大己貴神ハ係れる事あり  
を其事ハ不能通ゆれば語を省きて云ハ古書の例是  
あり又出雲神賀詞ハ豊葦原乃水穗國波晝波如五





月蠅水沸支夜波如火光神在利石根木立青水沫毛  
 事問天荒國在利然毛鎮平天皇御孫命尔安國止平久  
 所知坐之米申兵已命兒天夷鳥命尔布都怒志命半副  
天天降遣天荒布留神等半撥平平氣國作之大神半媚鎮天  
 大八島國現事顯事令事避支所見て荒振神等尔ハ  
 撥平云ハ大己貴神の御事尔ハ媚鎮云分たれて  
 條理云も混云方無く甚能聞えたり然れハ此一書  
 及古事記共尔大己貴神の國避の御事御在坐る即  
 上天尔復奏尔給へる者の如く書云れ云ふ云む事の  
 略云ふ過云なりける事尔ハ有ける若直復奏尔給ふ  
と爲る時ハ上云天



